

清流のほとり

みどり病院／すこやか診療所 広報誌

□発行責任者／病院長 松井 一樹

□編集／みどり病院管理委員会

□発行／2025年7月1日 第87号



食べられなくなった時の栄養、どうしますか？ ～人生会議・人生ノートのすすめ～

日本人は、健康寿命から平均寿命まで、約10年あるといわれています。「倒れてから10年経過しないと死なず、なかなかピンピンコロリというわけにはいかない。」とも言えます。そこで、今回は、その時の栄養について考えてみたいと思います。

私は、長期入院される患者さんに、「食べられなくなった時、栄養はどうされますか？」とお聞きしています。答えに窮する方もいれば、「そうならば自然で」「そんなこと今決められん」など、返事は色々です。ず～っと昔は、「食べられなくなったら終わり」でしたが、今は、様々な栄養補給の方法があります。患者さん一人一人、何が最適な栄養か？を考え、食事の提供ができるようになってきました。栄養学もかなり進歩しています。

その中でも、『胃瘻』は、食べられない方の栄養ルートとして秀逸な方法です。しかし、お腹から胃に穴をあけて管を通すという手術が必要で、少なからずリスクもあります。今、『臨床栄養』の中では、その適応は、どのように考えられているのでしょうか？哲学的課題でもあります。

まず、医学的には、胃瘻の適応について、ガイドラインでは、胃瘻が造設可能な全身状態、経鼻経管（鼻からのチューブ）栄養等4週間以上、胃瘻造設後の生命予後が1か月以上ある等となっています。このことを踏まえたうえで、そこへ至る考え方として、まず最初に、食べられなくなったとき、「胃瘻をつくるか？」より、『人工的に水分や栄養補給をするか？』を決めます。そして、胃瘻を造った後、『その人の人生の物語を豊かにできるか？』を本人、家族、医療チームで考えていきます。日本人は、特性として「何もしないのは見殺し」、この「見殺し感の回避」を考える傾向があり、末梢点滴や、安寧としての栄養に行きがちであることも念頭に置く必要があります。このような背景のもとで、自らが「食べられなくなったらどうするか？」を考えていくことが大切です。

今、国は『人生会議（アドバンス・ケア・プランニング：略称ACP）』を進めています。もしものときに、どのような医療やケアを望むのか、前もって考え、家族や信頼する人、医療・介護従事者たちと繰り返し話し合い、共有する「人生会議」を進めています。『会議』とは、その人と対話を尽くすことです。過去の人生を言葉で語ることができるようになることは、現在、そして未来を変える具体的な行動につながります。自分は、何が好きか？何を大切にしているか？を確認し、個々の治療の選択だけでなく、全体的な目標を明確にすることが大切です。そのために、自らの「人生ノート（様々な言い方があります）」をつくることが提唱されています。

「人生ノート」の一部は、すこやか診療所で『私の心づもり』として始まり、現在は、当院でも取り組んでいます。今後は、さらに人生の「来し方・行く末」を語っていただけるよう広げる取り組みをしていきます。

今、あらためて、40年以上も前に、「死生観、死の準備教育」を提唱「死ぬことを考えることは、生きることを考えること」と語った、アルフォンス・デーケンさんが思い出されます。

みどり病院長 松井 一樹



みどり病院 〒501-3113 岐阜市北山1-13-27 TEL (058) 241-0681

予約専用フリーダイヤル (0120) 489-760 平日 8:20～11:30

すこやか診療所 〒501-3113 岐阜市北山1-13-11 TEL (058) 243-0791

↑みどり病院ホームページはこちらから